



天 界 新 知 識

新知識各項に附けた番號は便宜上のもので分類に關係はない。各人の分類整理に應用されたい。

627

小 遊 星 は 總 計 1417 個

ドイツ國ベルリン計算局より小遊星年鑑1938年度のものが昨年末日に到着した。之れによると、原稿期日(昨10月1日)現在の登録星は1417個となつてゐる。其のうち1077個だけが1938年内に對衝となるもので、例によつて観測者のための8日毎の経緯度豫報が記載されてゐる。尤も、しかし、下の7個の小遊星は永い以前から観測が欠け、星の行方が不明であるから、豫報は掲げてゐない。

(155), (330), (400), (452), (473), (515), (719)。

豫報は皆、國際協定により、1950年頭の春分點による位置を掲げてゐる。しかし、下の4星に就ては1938年頭の春分點による平均位置が與へてある。

(1) Ceres: 1938年7月13日より翌年3月18日まで4日毎の精密位置。

(2) Pallas: // 5月10日 // // 1月9日 // // //

(3) Juno: // 1月30日 // 10月1日 // // //

(4) Vesta: // 1月22日 // 9月23日 // // //

軌道や位置の計算については、ベルリン計算局、フランクフルト遊星學院、レニングラド天文學院、リフィヤ天文學院、東京麻布天文臺、余山天文臺の各研究所のほか、英の B. F. Bawtree 氏、獨の S. Böhm 氏、米の D. Brouwer 及 W. J. Eckert 兩氏、獨の F. Henr 氏、米の P. Herget 氏、東京の廣瀬氏、米の F. H. Hollander 氏、南阿の C. Jackson 氏、東京の神田氏、米の J. E. Kline 氏、伊の C. Lombardi 氏、獨の W. Luther 氏、伊の H. Mader 氏、米の M. W. Makemson 氏、ブルガリヤの C. Popovici 氏、獨の G. Raynal 氏、アルゼリヤの A. Schmidt 氏、奥の J. Steinmetz 氏、瑞西の R. Stettler 氏、奥の F. Zweck 氏等が協力してゐる。

628

トウレ族新小遊星

去る10月11日ドイツに於て1937TEと呼ばれる小遊星が発見された。Gondolatsch 氏の計算によれば、此の星は公轉週期は約8年のもので、トウレ (279番の小遊星) と同族のものであることが知れた。年末年始の豫報位置は下の通り

	赤 經	赤 緯	光 度
¹⁹³⁷ 12月21日	^h 1 22.5	^m +8°31'	
29	1 23.8	+8 44	
¹⁹³⁸ 1月 6日	1 26.2	+9 3	14.9
14	1 29.7	+9 28	

光度は約14.9である。因にトウレ族の小遊星とは木星週期(11.86年)の4分の3の週期を持つ小遊星で今日迄は只第279番のトウレ星 (Thule) のみが知られて居たに過ぎない。今回第2のメンバ1が発見された譯である。〔花山急報273〕

629

1933年度の變光星年鑑

獨國ベルリン大學(バベルスベルグ)天文臺の小型出版物第18號として Katalog und Ephemeriden veränderlicher Sterne と稱する變光星年鑑が、例年の通り、昨秋出版され、12月31日吾々の手に入つた。編輯者は昨年から Prager 氏の後を繼いだ H. Schneller 氏である。内容は、A. N. 6303 號に載つた命名表第35回中の795星を加へ、其の代りに楕座CC星を取り消して、總計7762ヶの變光星が載せられてゐる。表の作り方や、星の分類法等は皆前年と同じである。全冊240頁。

630

ホブル彗星の橢圓軌道要素

昨1937年第7番目に発見された Hubble 彗星(1937g)の軌道を佛國 Poitiers 市に住む H. Duborq 氏が計算した。材料は昨年8月6日、同24日、9月11日の觀測からであるが、算出した要素は

近日點通過期日	T = 1936年11月21日76373, U. T.
近日點引數	$\omega = 148^{\circ}30'59''.6$
昇交點の黃經	$\Omega = 96\ 41\ 24.9$
軌道面の傾斜	$i = 11\ 30\ 07.7$

} 分點 1937.0

離 心 率 $e = 0.9894744$ 近日點距離對數 $\log q = 0.288630$

即ち、橢圓軌道であつて、週期は非常に長い。〔IAUC. 702〕

631

射手座に發見された新星一覽表

夏の南天に低く見える射手は、宇宙の中心のある所で、非常に恒星の多い天であるが、新星 (NOVA) も亦今までに最も多く見つけられてゐる。下に載せるのは米國ハーバード大學天文臺のレオン・カンベル氏が〔P. A. 450〕誌に記したもので、最近までのものを網羅してゐる。

順番	極大の年	名	符號(1900.0)	極大光	極小光	發見者
1	1893年		$1754^h - 35^m$	12.5	<16.5	Swope 女史
2	1897	LQ	1822—27	13.0	<15.5	Woods 女史
3	1898		1856—13	4.8	15.	Fleming 夫人
4	1899		1813—25	8.5	14.5	Cannon 女史
5	1900	HS	1822—21	11.6	16.5	Woods 女史
6	1901		1800—27	10.3	<15.	Cannon 女史
7	1905		1802—32	7.1	<17.	Woods 女史
8	1910		1753—27	8.1	15.4	Fleming 夫人
9	1912		1828—29	11.	<17.	Innes 氏
10	1914		1828—26	14.2	<14.7	〃
11	1914		1835—28	15.8	<17.	〃
12	1914		1759—31	8.	<17.	Woods 女史
13	1917	BS	1820—27	9.	<17.	Innes 氏
14	1919		1825—29	7.	14.	Woods 女史
15	1924	GR	1816—25	11.4	14.0	〃
16	1924	FL	1753—34	8.4	<13.	Gill 女史
17	1926	FM	1811—23	8.6	<16.	Cannon 女史
18	1926	KY	1755—26	10.6	<16.0	Woods 女史
19	1927	V 363	1905—30	8.8	16.	Becker 女史
20	1930	V 441	1815—25	8.7	16.0	Hcfleit 女史
21	1931	V 522	1841—25	12.9	<15.3	Ferwerda 女史
22	1936		1749—27	6.5	<12.5	Burwell 女史
23	1936		1813—26	10.8	<16.5	Mayall 氏
24	1936	V 630	1802—34	4.5	<14.0	岡林氏

上記のうち、殆んど總ては寫眞板上に於いて發見されたもので、多くは極大

光輝の時機よりも発見がおくれたがため、追跡観測が不可能であつた。しかるに岡林君の新星だけは眼視的に発見されたため、直ちに多くの観測が行はれたのであつた。

632

地 球 の 年 齢

放射能を有つカリウムの一種に K40 と呼ぶものがある。之れは非常に永い年月の間に自然にカルシウムに變じて了ふもので、恰もラヂウムが鉛に變るのに似てゐる。米國の A. Keith Brewer 博士は此の K40 の研究により、地球の年齢は30億年以下であるといふ結論を下した。

普通のカルシウム K39 には放射能は無いが、現今は K40 よりも8300倍も多量に我が地殻中にある。大昔しには K40 が殆んど皆無であつたが、今から2億5000萬年前、即ち石炭紀の頃は、K40 は今よりも4倍乃至15倍も多かつた。この K40 は生命を速進するものであるが、かの石炭紀に大樹木が密生したのは K40 の多かつたためかも知れない。

上記ブルトワ博士の計算では地殻が凝固し始めたのは約143000萬年前であるが、之れはウラニウムの研究から諸學者が計算した150000萬年といふのに頗る近い。

最 も 早 く 飛 ぶ 虫

空洞内の風速試験などによると、飛行機は空氣の抵抗のため、毎時間1000キロメートル以上は飛べないのださうだが、近頃、米國ニウヨークの博物館の Roy Chapman Andrews 氏の發表する所では、Cephenomyia といふ虫は毎秒400米、即ち毎時1300キロも飛ぶものだといふので、不思議がられてゐる。

本誌への御投稿は下記宛にお願いします。(締切は毎月末のこと)

「天界」原稿の送り先は： 京都市左京區吉田泉殿町59 山 本 進宛

支部通信・地方だよりは： 京都市上京區紫竹西南町55 宇野 良雄宛

誌上廣告に關する原稿は： 大阪市南區安堂寺橋通1の33 西森紀久雄宛